

第 22 回 愛媛形成外科研修会

抄 録 集

日 時 平成 20 年 12 月 6 日 (土) 17 時 30 分～

場 所 独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター
3 階 研修室

(松山市南梅本町甲 160 TEL : 089-999-1111)

当番世話人 松山赤十字病院 形成外科 庄野 佳孝

プログラム

Section 1 (17:30~18:15)

座長 原田 雅奈

1. 臨床的に粉瘤と誤診されやすい病変の検討
わたなべ皮膚科 形成外科 渡部 隆博
2. 周術期における抗凝固療法への対処について
愛媛労災病院 形成外科 木暮 倫久
3. 腔脱部に生じた巨大 verrucous carcinoma の 1 例
四国がんセンター 形成外科 鈴木 良典
4. 骨盤部 AVM の 2 治験例
愛媛大学医学部附属病院 皮膚科(形成外科診療班) 中岡 啓喜
5. total reconstruction を行った鼻腔内基底細胞癌の 1 例
宮本形成外科 青木 恵美

Section 2 (18:15~19:00)

座長 戸澤 麻美

6. 遊離爪移植を行った先天性爪欠損症の 2 例
愛媛大学医学部附属病院皮膚科(形成外科診療班) 森 秀樹
7. ビスホスネート系薬剤と顎骨壊死
愛媛県立中央病院 形成外科 小林 一夫
8. 下腿閉鎖性骨折に伴う足部血行不全に対し、即時血行再建を行い救肢できた 1 例
愛媛県立中央病院 形成外科 福井 季代子
9. 失敗しない microsurgery ー頭頸部再建 3年間連続 164 連勝の秘訣ー
静岡県立静岡がんセンター 形成外科 永松 将吾
10. 局所皮弁にて再建した鼻翼全層欠損の 1 例
松山赤十字病院 形成外科 吉井 聡佳

Section 1 (17:30~18:15)

座長 原田雅奈

1. 臨床的に粉瘤と誤診されやすい病変の検討

わたなべ皮膚科形成外科

○渡部隆博

(5分)

いわゆる粉瘤（毛包嚢腫、表皮嚢腫、類表皮嚢腫）は日常治療する機会の多い良性腫瘍で、通常診断は容易である。最近、粉瘤を考え切除した病変が有棘細胞癌と診断された症例を経験したのを機に、粉瘤と誤診されやすい病変について検討した。平成19年の1年間に、当院から病理検査に提出した術前臨床診断が粉瘤であった117例のうち、12例（10.2%）で術前臨床診断と病理診断が一致しなかった。症例を供覧し、検討する。

2. 周術期における抗凝固療法への対処について

愛媛労災病院 形成外科

○木暮 倫久

(3分)

高齢者社会になってきた昨今、抗凝固療法を受けている高齢者患者を手術する機会も少なくない。このような場合、当該診療科より「休薬は望ましくない」という判断があった場合の対応に苦慮することがある。未だわれわれも的確な判断基準は持ち合わせないが、われわれの対処法を紹介するとともに、他施設での対応もお伺いしたい。

3. 膣脱部に生じた巨大 verrucous carcinoma の 1 例

四国がんセンター 形成外科

○鈴木 良典、河村 進

(3分)

症例は 84 歳女性。2003 年子宮脱にて子宮全摘術施行。術後膣脱発症するも放置していた。2008 年 1 月膣脱部にいぼ状の病変出現。増大傾向あるため前医受診し、生検したところ verrucous carcinoma と診断され当科紹介。膣脱部に 6cm × 7cm のカリフラワー状の腫瘤を認め、全身精査の後、切除術を行った。術後、膣は還納され、腫瘍・膣脱の再発も認めていない。

4. 骨盤部 AVM の 2 治験例

愛媛大学医学部附属病院皮膚科（形成外科診療班）1）、静岡がんセンター形成外科 2）、済生会今治病院形成外科 3）、宮本形成外科 4）

○中岡啓喜 1）、森 秀樹 1）、松本由美子 1）、原田雅奈 1）、山下昌宏 1）、永松将吾 2）、戸澤麻美 3）、青木恵美 4）

(5分)

（症例 1）21 歳女性、約 8 年前より仙骨部左の増大性の皮下腫瘤を自覚。近医の血管造影で内腸骨動脈領域を流入血管とする AVM と診断された。

（症例 2）30 歳女性、10 年以上前より左臀部の疼痛を伴う皮下腫瘤に気づく。近医で問題ないと言われたが、3 年前に他院を受診し AVM を疑われ 6 ヶ月前に当院外科を紹介された。2 例とも放射線科の協力下に治療を行い、外科治療も併用した。可能な治療を総合的かつ効率よく行なったことが相乗効果を生み、良好な結果につながった。

5. total reconstruction を行った鼻腔内基底細胞癌の 1 例

宮本形成外科

○青木恵美、宮本義洋、宮本博子、岩垂鈴香、渡部聡子
(5分)

79 歳、男性。3 年前に他院で鼻腔内基底細胞癌を切除された。当院初診時には再発を認めたため拡大切除を行い、梨状口縁に沿って外鼻全欠損となった。拡大切除後 3 か月時に、前額皮弁および骨移植による再建を行った。治療経過を供覧し、文献的考察を加え報告する。

Section 2(18:15~19:00)

座長 戸澤麻美

6. 遊離爪移植を行った先天性爪欠損症の2例

愛媛大学医学部附属病院皮膚科 形成外科診療班

○森 秀樹、中岡啓喜、山下昌宏、原田雅奈、松本由美子

(3分)

症例1: 43歳女性、生来両側の示指の爪甲の部分欠損に対し両側の第二趾からの遊離爪移植を行った。症例2: 5歳男児、左示指の爪甲部分欠損に対して同様に第二趾からの移植を行った。

7. ビスホスネート系薬剤と顎骨壊死

愛媛県立中央病院 形成外科 おがた形成外科

○小林一夫、中川浩志、徳永和代、福井季代子、緒方茂寛

(5分)

ビスホスネートは石灰化抑制作用を有する生体内物質であるピロリン酸の一部を変えた薬剤の総称で、骨のハイドロオキシアパタイトに親和性を示します。臨床的には骨粗しょう症、悪性腫瘍の高カルシウム血症、癌の骨転移に使用されています。これまで、発熱の副作用がみられましたが、最近、顎骨壊死との関連性が指摘されています。この薬剤にて顎骨壊死が見られた症例を提示します。

8. 下腿閉鎖性骨折に伴う足部血行不全に対し、即時血行再建を行い救肢できた1例

愛媛県立中央病院 形成外科

○福井季代子、小林一夫、中川浩志、徳永和代

(3分)

循環障害を伴う四肢外傷では、迅速な血行再建が必要となる。今回われわれは、下腿閉鎖性骨折に伴う足部血行不全に対し、即時血行再建を行い救肢できた症例を経験した。症例は64歳男性。左下腿をワイヤーに巻き込まれ、足部血行不全を生じていた。当院搬送までに3時間が経過しており、即時血行再建が必要と考えられた。術中所見では、前脛骨動脈は血栓を生じており、これを除去し静脈移植を行った。治療経過について報告する。

9. 失敗しない microsurgery —頭頸部再建 3年間連続 164 連勝の秘訣—
静岡県立静岡がんセンター形成外科

○永松将吾, 中川雅裕, 茅野修史, 小泉拓也, 赤澤 聡,

松村 崇, 舘 一史, 成田圭吾, 福島千尋, 飯田拓也

(5分)

当院では2005年8月の術後静脈血栓1例を最後に、過去3年間164例の遊離組織移植による頭頸部再建手術で術後吻合部血栓を経験していない。

microsurgery術者は科部長以下のべ10名が交代制で担当してきたが、卒後年次、専門医資格の有無、経験は様々であり当院で初めてmicrosurgeryを開始した者も5名あった。安全な遊離組織移植とは何か？当院での取り組みにつき報告したい。

10. 局所皮弁にて再建した鼻翼全層欠損の1例

松山赤十字病院 形成外科

○吉井聡佳、庄野佳孝

(3分)

症例は37歳男性。自転車で走行中に溝に転落し、右鼻翼全層欠損、鼻骨骨折、顔面挫滅創を受傷。受傷3日目に局所皮弁＋人工真皮にて鼻翼欠損部の再建術を施行し、後に皮膚欠損部に植皮予定であったが、上皮化してきたため保存的に治療した。拘縮により外鼻孔の狭小化を来たしたため受傷後10ヶ月で瘢痕拘縮形成術施行し、以後レティーナ併用にて比較的良好な結果を得た。若干の文献的考察を加えて報告する。

愛媛形成外科研修会総会 (19:00～19:15)

1. 会計報告
2. 次回研修会の日程
3. その他